

政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第 11 号
2001 年 1 月

目 次

挨拶

政治思想研究の有意性への問いかけについて

佐々木 毅 1

研究動向

日本における初期社会主義研究の動向

山泉 進 2

韓国学会動向

『政治思想研究』第 2 集 2000 年春号 韓国政治思想学会 目次 8

CSPT2000 年度年次大会に参加して

安武 真隆 11

会務報告

理事会記録 15

1999 年度会計報告 18

2000 年度予算

2001 年度研究会企画案 19

政治思想研究の有意性への問いかけについて

代表理事 佐々木 毅

本学会は世界でも稀なほど多数の政治思想研究者を抱えた学会である。この点は過去半世紀にわたる政治思想研究の歴史を考えた場合、誠に感慨無量のものがある。幾多の先輩、先達の熱心な教育や研究、そして指導の成果がここに実りつつあることは改めて述べるまでもない。この学問的資産をどのように生かしていくかというのが、我々の前に横たわっている課題である。

「何のための政治思想（史）研究か」という古典的問いを考えることは、何時如何なる場合でも忘れてはならない我々の暗黙の責務である。しかし、歴史は時々極めて無遠慮に、粗暴な形で、同じ問いを我々の前に突き出すことがある。先の古典的な問いを何段階も飛び越える形で、歴史は「それは何の役に立つのか」といきなり藪から棒に問いかけるのである。60年代の学園紛争の頃、こうした問いかけは日常的に行なわれた。その後、約30年余り、こうした問いかけは暫く姿を消し、政治思想研究者は淡々とテキストと取組み、成果をあげてきたように見える。

しかし、世間でいう「右肩上がり」の終わりとともに、この無遠慮で粗暴な問いかけは経済主義的な装いをとって露骨に現れるようになった。80年代の英米の大学の実情を耳にしたことのある人にとっては、これはかなり見慣れた風景である。そして、日本でも諸般の事情があって、政治思想研究者は大学においてその意義を改めて問われ、端的に言えば、政治思想研究者に対し、大学の門戸は急速に狭くなってきているといわれている。

「それは何の役に立つのか」といった問いにどう回答するかは会員各位に考えてもらうとして、私見によれば、政治思想研究者は自らの研究の有意性について余りにも自己主張が少なく、発揮すべき能力も発揮していないという雑感を持っている。この点について一度是非とも考えていただきたい。そもそも政治思想研究が政治活動の意味を問うことを究極のテーマとしていることから分かるように、そうしたことについて言説を展開することはむしろ我々の得意とすることではないか。政治学の他の領域と比べても、自らの有意性を展開することにおいて大きな困難を抱えているといったことは決してあり得ない。但し、こうした有意性は抽象的には説得できないのであって、具体的な作業を通して納得させるという手法が必要になる。例えば、徐々に見られるようになった政治理論的テーマとの取組みといったものはその好例のように見える。

私は当座の必要を凌ぐ方策としてのみこうしたことを述べているわけではない。むしろ、こうした有意性を明らかにし、説得する努力は本来の政治思想研究にとっても裨益するところ少なくないというのが私の見解である。その意味では政治思想研究の意味について弁明を求められる時代が来たことは一概に悪いことばかりではないのである。

日本における初期社会主義研究の動向

山泉 進 (明治大学)

1.

この夏の9月、イギリス南部の観光地ブライトンの一般書を扱っている書店で、フランシス・ウィーンの『マルクス伝』(1999、以下発行年だけをこのように表示する)が、確かベストセラーの5番目あたりにランクインされていて、ちょっと意外な感にうたれた経験をした。平積みにされたペーパーバック版の表紙に写し出された、なじみの髭面のマルクスの顔から発せられ眼差しは、気のせいかわ分やさしそうに見えた。いまさら、マルクスでもなかろう、という日本での雰囲気とは違って、イギリスは労働党が政権を握っている国、そんなこともあるのかな、と少しは納得したつもりになった。そもそも、今回、イギリスまでわざわざやってきた目的のひとつに、2000年2月に100年を迎えた、そのイギリス労働党の百年記念の様子、といってもせいぜい出版物をさがすのが関の山ではあるが、をみてみようという目論見があった。

来年、2001年5月が、日本で最初の社会主義政党、もちろんへそ曲がりのひとは車会党や東洋社会党があったのではないかというかもしれないが、少なくともヨーロッパ社会主義の思想を受け入れたという意味では、最初の社会主義政党であった「社会民主党」が結成されて百年ということになる。それがどうしたという声はどこかから飛んで来そうな気がするが、ともかく百年になる。「自由民権百年」の催しがあれほど盛大に行われたことと比較すれば、何とも寂しい限りであるが、時代のせいかわ、「就職」のせいかわ、ともかく致し方がない。

日本でも、たぶんどこかで、どなたかがイギリス労働党の研究をされているのであろうが、われわれのように日本の初期社会主義を研究するうえで参考ができるようなものには近年出

ったことがない。同じようなことは、日本が大きな影響を受けたアメリカの社会主義思想や運動についても言えることではあるが。ともかく、日本での「社会民主党百年」を記念するうえで参考にできそうな、イギリス労働党百年の記念の本として目に付いたものとしては、まず Brian Brivati と Richard Heffernan が編集した *The Labour Party—A Centenary History* (2000) と Keith Laybourn が書いた *A Century of Labour—A history of the Labour Party 1900-2000* (2000) をあげることが出来る。いずれも今年刊行されたものであり、前者にはブレア首相が序文を寄せている。もう少し発行時期をひろげて、最近の労働党の歴史に関する書物をピックアップすれば、Harry Harmer がまとめた *The Labour Party 1900-1998* (1999) があり、これは Longman Companion to History のシリーズの一冊として刊行されたもので、選挙の統計、年表、人名・事項説明、文献、等が記されていて便利な案内書となっている。Geoffrey Foote の書いた *The Labour Party's Political Thought—A History* (1997) は、初版が1985年に出版され、結成から現代にいたるまでの労働党の直面した政治思想史的傾向を幅広くとりあげ、分析している点で教科書的存在といえる。1997年に第3版が出版された。Making Contemporary Britain Series の一つとして Eric Shaw が著した *The Labour Party* (1996、reprinted 1999) はサブタイトルに「1945年以後」とあるように、戦後の労働党史を「古い」労働党からの脱皮という視点から叙述した好著である。ヨーロッパまで幅を広げて労働党の思想や政策を扱ったものとしては、Donald Sassoon の *One Hundred Years of Socialism* (1996) のような著作もあるし、日本

の初期社会主義者の間でも馴染の深かった、ケア・ハーディについても最近いくつかの伝記が刊行されているが、いずれ紹介する機会もあろう。

ここでは、日本の初期社会主義研究の現状をかたるのが目的であるので、これ以上イギリス労働党百年の出版物にこだわる必要もないのであるが、ともかくも「社会民主党百年」といっても、イギリス労働党のように継承者が存在するわけでもなく、一般の人たちはもちろんのこと研究者の間でも関心を惹き起こさないことおびただしい状況である。

2.

私たちが、「初期社会主義研究会」といういささか時代に逆行するような研究会を発足させたのは、1883年秋、「平民社80年」の記念集会を開いた時で、いまだソ連も東欧の社会主義国も崩壊以前のことであった。社会主義諸国が行き詰まりをみせ、それに伴うように社会主義研究も下火になっていくなかで、日本の「社会主義」の再検討をおこなってみたいというのが私たちに共通した問題関心であった。ただ、その際「初期」にこだわったのは、積極的とは言えないような二つの理由からであった、と私は考えている。以下は、会員全体に共通した見解ではなく、私の個人的な考えとして述べたい。問題関心の一つは魅力を失った社会主義研究からの脱皮はいかに可能か、ということであった。私たちが注目したのは、個々の社会主義者の魅力であった。思想が精密化され運動が組織化されるにしたがって、「社会主義」はその顔を失ってきた。政治体制となった「社会主義」が組織を肥大化させ、逆に官僚組織により支配されるようになると、救済されるはずであった民衆の顔は組織の背後に隠されてしまった。ロシア革命以降の「社会主義」をめぐる事態は、運動や思想のレベルにおいてすら、そのような傾向をもった。あるいは、むしろレーニン、スターリン、毛沢東などに対する個人崇拜こそが問題なのだと反論するひとがいるかもしれない。しかし、近代における独裁や個人崇拜は、民衆が顔を失って

組織化されるときに惹起される事態である。片山潜、安部磯雄、木下尚江、幸徳秋水、堺利彦、大石誠之助、田添鉄二、森近運平、管野須賀子、大杉栄、等々と並べても、何の魅力も感じない人もいよう。これらの人々は、思想的に幼稚で、運動を十分に組織化しえず、衝突を繰り返すだけの、未熟な段階のなかで活動した人物たちであり、その評価も、これまでは先駆者としての意義は認めても、それ以上のものを認めるものではなかった。むしろ、いかにその後「科学的」理論を消化し、運動が組織化されたかが評価の軸にされる傾向にあった。私たちは、だからこそ個々人の顔が見え、思想形成の動機が鮮明であり、ヒューマニズムや理想主義に向かう素朴な感情が魅力なのだ、と逆転させて考えてみようとしたのである。これが「初期」にこだわった第一の理由である。

このように「社会主義」を理論や運動の論理としてよりも、個人の人的魅力へと還元して捉えようとする傾向は、時期区分の問題を曖昧にすることは確かである。その点では、初期社会主義研究会が対象としている「初期」とは何時の時点までを指しているのか、という質問をよくうける。もちろん、一般的に言えば「初期」という概念は、時間的な概念であり、いつまでが初期で、いつからが中期や後期なのかという問いと結びついている。日本の「社会主義」思想や運動のなかで個人よりも組織が優先される時期を、いつと確定することはなかなか困難ではあるが、少なくとも、運動についての具体的な組織論をもち、しかもそれが「正統化」される状況、つまりコミンテルンの支部として日本共産党が結成され、左翼運動のなかで一定のプレゼンスを示す状況を想定することは一つの考え方であろうと思う。その意味では1922年の日本共産党の結成から昭和初期の時期を一つの区切りとしてもよいと思っている。しかし、本音を言えば、個人的には、そのような時期区分以上に、理念的に考えて、計画経済と一党独裁を柱とするソ連型マルクス主義が「正統化」される以前の、多様に摸索した時代の「社会主義」を総称して「初期社会主義」と呼んでみたいと

思っている。その意味で、私にとっては「初期」とは時間的な概念というよりも、むしろ理念的な概念として捉えたいのである。このことが、「初期」にこだわった第二の理由である。西欧の社会思想史などでは、マルクスやエンゲルスが確立したとされる「科学的」社会主義以前の時期の社会主義思想を、総称して初期社会主義と呼ぶことが多いが、このように理念的に把握すれば、時期的な乖離の問題として単純な進化論的軸ではかるのではなくて、比較思想的な研究への展望がひらかれることになる。

1983年、10人足らずではじめた初期社会主義研究会は、現在では全国に100名を越える会員をかかえている。「社会主義」という対象から規定されるように、会員の専門分野は、歴史学、政治思想史、経済思想史、社会思想史、文学研究まで多岐にわたっている。また、十分とはいえないまでも、アメリカ、ドイツ、イギリス、フランス、中国などの海外の研究者との交流もある。機関誌『初期社会主義研究』は、1986年の創刊号以来、現在12号まで数えている。最近の特集を列記すれば、第8号「冬の時代」(1995)、第9号「平民社群像」(1996)、第10号「堺利彦」(1997)、第11号「初期社会主義研究の現状と課題」(1998)、第12号「幸徳秋水」(1999)、そして今年の第13号では「社会民主党百年」の記念特集を組み、刊行準備中である。また、1998年には、研究会事務所に「平民社資料センター」を設立し、2003年に百年を迎える「平民社」の記念事業を企画する体制を準備することにした。「平民社資料センター」には、荒畑寒村の研究者として著名である堀切利高氏の蔵書を中心に、寄贈された西川光二郎・文子の蔵書や資料を加えて書庫を附置し、今後、失われゆく関係蔵書や資料の収集、保存、閲覧を目指すことにしている。すでに、法政大学の松尾章一氏からは、日本の社会主義思想形成に多大な影響を及ぼしたリチャード・イリーの日記類を中心とするマイクロフィルムの寄贈を受けている。おそらく、初期社会主義関係の基本的図書と情報に関しては、他の諸機関にひけをとらないというであろう。最近では、大学院生たちの加入も

増え、なかには指導教授からの紹介で訪ねて来る学生もいる。そして、もちろん来年の「社会民主党百年」の諸事業も初期社会主義研究会と平民社資料センターが中心となって活動している。

3.

研究会の宣伝のようになって、気分を悪くされている人もいるかもしれないが、実はこの研究会の活動を抜きにしては、日本の初期社会主義研究の動向は語れないのである。機関誌『初期社会主義研究』の創刊号は「初期社会主義研究の現状と課題」を特集し、私を含む3名が報告して討論会をもった記録を掲載している。おそらく、戦後から1980年代前半までの研究史の流れと現状を最もよく捉えた分析になっていると思う。その後、先に触れたが第11号(1998)でも同テーマで特集を組み90年代の動向に言及した。しかし、それ以上に第3号以来、機関誌に掲載している「初期社会主義研究関係文献目録」を見ていただければ、この20年近くの研究動向を具体的に把握していただけたらと思う。私自身は、創刊号での報告を踏まえ、明治20年代から明治末の「大逆事件」にいたる時期を対象をしばり、『社会主義事始』(1990)を刊行した。そこに、1980年代までの基本文献や主な研究書・論文を掲載しておいたので、ここでは大雑把な流れを紹介しておきたい。

研究動向を知るうえでの一つ目の手がかりは、その動機ということである。動機は基本的には個人的なものであるが、それでも世代的経験や時代的要請に裏付けられた社会的動機というものがあって、研究対象や方法を規定している。例えば、運動を実際に経験した世代、運動の経験はないが経験者と交流をもった世代、それらを一切もたない世代、というような主体的区分は意外に大きく動機に影響を与えている。もちろん、経験には常に個人的なヴァイアスがかかることを考慮にいれておかなければならないが、社会主義思想や運動に関しては、すべての事実が活字化されているわけではないし、いやむしろ活字化できないことが多かったため

に、この経験の共有の度合いというのは、研究動機としては重要である。経験の共有の度合いという問題は、一般的に言えば回想から分析へと対象からの距離を広げていくが、どちらがより本質的に事実をとらえているか、という問題とは別のことである。ここでは、経験から遠ざかることにより方法化が必要とされるという一般的傾向を指摘しておきたい。ただ、注意すべきは、荒畑寒村のように長生きした人物は、1980年代まで生き、かつ著作を刊行したので、このような世代の違いが時間軸にそって並ぶわけではない。

次に、時代的要請から来る動機というものがある。もちろん、スターリン批判やベルリンの壁の崩壊とソ連邦の解体というような歴史的事件が内在的思考にどのような影響を与えたか、というような問題はきわめて重要であるが、ここでは直接的にその問題にまでは立ち入ることはできない。むしろ、ここでは研究対象の特徴的な変化を表面的に捉えて、この問題に言及しておきたい。例えば、戦後すぐから1960年代までの研究の中心線にあったのは、幸徳秋水と片山潜であった。幸徳の場合は大逆事件という隠された事件の真実を知るという戦後の民主化された社会での要請があったし、片山の場合には、戦後の社会主義運動の歴史的正当性を主張するうえで欠かせない人物であった。とりわけ、1960年代の大逆事件に対する再審請求は、市民的支援団体「大逆事件の真実をあきらかにする会」への多くの研究者の参加をみた。1970年前後から、社会的要請として研究を動機づけたものは足尾鉍毒問題であったといつてよい。「公害」は、この時代のキー・ワードとなり、他方、政治の季節が過ぎ去ったあとの新しい磁場となった。1980年代以降は、閉塞した社会主義国家の現実が明らかにされ、全く魅力を失い、そして政治体制として基本的に崩壊した時期である。研究対象としてリアリティを失った、この時期の研究の方向を私は、「実像の再興」という言葉で表現した。研究動向を掴むうえで重要なのは、以上のような主体的な動機に加えて、研究条件あるいは研究環境の変化というものが

ある。これも詳しく分析すれば、様々な要素を指摘することができようが、ここでは、直接的に影響を及ぼす文献や資料に絞っておきたい。この文献や資料整理は、当初は幾つかの研究者集団によって行われた。例えば、復刻版でいえば、週刊『平民新聞』をはじめとする明治期の中心的な社会主義新聞と雑誌を復刻した明治文献版「明治社会主義史料集」(全8巻・別冊4巻・補遺8巻、1960~63)、労働運動史料委員会が刊行した『労働世界』(1960)などがそれである。また、鈴木茂三郎が収集し近代文学館に収蔵された資料類が社会文庫叢書として刊行されたことも加えておかなければならない。その後は徐々に出版社ベースに移り、『家庭雑誌』(1982)、大正期へ来て『へちまの花』『近代思想』『新社会』(1983)、さらに『文明批評』『国家社会主義』(1984)などが刊行され、取り締まる側の内務省資料も『社会主義沿革(1)(2)』(1984・86)として出版された。また、基本文献がアンソロジーとして纏められたものもある。『明治文化全集』に収録された「社会篇」(1929、改版1965)や「社会篇(続)」(1957)などは既に利用されてきたものであるが、60年代から70年代にかけて『資料・日本社会運動思想史』(特装版、全6巻、1968)、『明治社会主義資料叢書』(全7巻、1972~78)などが刊行され、現在では明治期の文献に関しては比較的容易に読むことができる環境が整ったといえよう。また、個人全集や選集の刊行も充実されてきて、『片山潜著作集』(全3巻、1959~60)に続き、『幸徳秋水全集』(全9巻・別巻2・補巻1、1967~73)、『木下尚江著作集』(全15巻、1968~73)、『堺利彦全集』(全6巻、1970~71)、『荒畑寒村著作集』(全10巻、1976~77)、『石川三四郎著作集』(全8巻、1977~79)、『大石誠之助』(全2巻、1982)、『森近運平研究基本文献』(全2巻、1983)などがあいついで出版された。大杉栄についても戦前版全集(全10刊・別巻1)の復刻(1963~64)がおこなわれるとともに、新版の『大杉栄全集』(1963~65)の刊行がなされた。

このように、1980年代までには基本文献の復

刻や個人全集の刊行がすすみ、しかも一般紙のマイクロフィルム化とコピー機の普及により、研究条件が整備された結果、情報の収集が精密化され、研究の幅は格段に広がることになった。

4.

ところで、1980年代以降の研究動向の特徴を、私は「実像の再興」と呼んだが、それは失われたリアリティと魅力回復への努力を込めてこう呼んでいるのである。それでは、具体的にどのような内容としてあらわれているのであろうか。私は、研究対象の側面から見て、「個人」「地域」「テーマ」という三つのキーワードを用意している。その一つである「個人」といことについていえば、文字通り個人研究への傾斜という点があげられると思う。この場合二つの特徴をもつ。一つは、対象の拡大である。この傾向は、終戦直後の幸徳秋水や片山潜、さらには後の森近運平や田添鉄二などを加えてもいいが、いわば運動の中心にいた人物からその周辺にいた人物にまで研究対象の範囲が拡大されたということである。もちろん、赤羽一（巖穴）を松尾貞子氏が紹介したりしたように、この傾向が従来まったくないわけではなかった。しかし、いわば発掘的な位置付けとは異なる視点から本格化するのは80年代に入ってからであるといつてよかろう。田中真人氏の『高島素之』（1978）などはその先駆けといつてもよいのかもしれないが、成田龍一氏が『加藤時次郎選集』（1981）を編み、伝記『加藤時次郎』（1983）を書いたことが、その流れを確実なものにした。成田氏は、どちらかと言えば脇役的存在として考えられてきた人物にスポットをあて、「バイプレイヤー」つまり、脇役ではなく共演者としての地位を与えた。最近では、岡林伸夫氏の山根吾一伝、『ある明治社会主義者の肖像』（2000）の丹念な仕事が生まれている。

二つ目の特徴としては、これまでの個人研究が、どちらかといえば活動記録、ないしは思想紹介に傾き、外在的に人物を捉える傾向があったのに対し、80年代の作業は、むしろ精神の内部にまで入りこみ、その時々のお気持ちにまで言

い及ぶような傾向が見られるようになったことである。これは本来の意味での伝記的手法といつてもいいのかもしれないが、その個人の考え方や生き方を個性的に捉えようとする方向へと問題関心の移動がおきている。闘う対象を見失った80年代の「自分探し」の思潮が幾分反映しているのかもしれない。田中英夫氏は『ある離脱』（1980）において西川光二郎の「転向」問題を解明しようとして、結局は彼の全生涯のなかで検証するのを感じ、『西川光二郎小伝』（1990）を著した。この著作は個人誌『六』に10年間にわたってコツコツと連載し続けたものをまとめたもので、年を追ひ、月を追ひ、日を追ひて彼の言動に迫り、その思考の推移を読み解いていった。田中氏は、多くの人たちからの資料提供の機会を個人誌という媒体でおこなうという独自の研究スタイルを作り出した点でもユニークであった。ついでに言えば、現在月刊の個人誌『孤剣雑録』を発刊し、山口孤剣伝を執筆中である。清水卯之助は『管野須賀子全集』（全3巻、1984）をまとめ、新しい管野像を求めて伝記に手を付けたが完成に至らなかった。その後大谷渡氏が『管野スガと石上露子』（1989）を書いて、ある程度成功させた。

研究動向の第二のキーワードは「地域」である。東京を中心として展開された平民社をはじめとする初期社会主義の運動に対して、地方での運動を紹介した論文は80年代以前からもあった。小山仁示氏は「明治期大阪の社会運動」を『大阪地方労働運動史』（1958～63）に掲載したことがあったし、関山直太郎は「和歌山県における初期社会主義運動」（1959～63）を『紀伊経済史研究叢書』他に連載し、別に毛利柴庵の主筆した『牟婁新報』の復刻をおこなった（1959）。また、『神奈川県労働運動史（戦前編）』（1966）なども金子喜一を紹介したりしていた。しかし、80年代から、住民運動が定着し、地方の自立がテーマとされ、かつ「自由民権百年」のイベントが積極的に地域の「掘り起こし」を掲げ成果をあげていったことが刺激となって、地域ネットワークの中から初期社会主義運動や思想を再構築しようとする問題関心が台

頭してきた。小池喜孝著『平民社農場の人びと』(1980)、田村紀雄著『明治両毛の山鳴り』(1981)、荒木伝著『なにわ明治社会運動碑』(1983)などはその先駆的な仕事であった。しかし、何と云っても、橋本哲也氏の論文「地方における初期社会主義の活動」(『金沢大学経済論集』1984)は、週刊『平民新聞』『直言』等の読書会などを契機にして誕生した、地域における社会主義者の団体を全国的に俯瞰し、かつそれらの活動傾向を分析した点で画期的な労作といえる。上村希美雄氏は『宮崎兄弟伝』(アジア篇中、1996)において、民蔵の土地復権同志会における「地方伝道」の足跡を丹念に解明したが、今後、伝道行商運動などを媒介とするネットワーク形成についてもますます解明がすすむであろう。また、丹波の銀行家で、初期社会主義者たちのスポンサー的役割を果たした岩崎革也宛の書簡類が発見されたことも、地域の社会主義運動を考えるための一石を投じている。

この地域ネットワークの解明は、個人研究と結びつくことにより多くの成果を得ている。日外アソシエーツから刊行された『近代日本社会運動人物大事典』(全5巻、1997)には、その成果の一部が結実されているが、それほど立派なものでもなくとも、森川松寿の生涯を明らかにした、吉岡康『除籍謄本を読む』(1995、続編1997)のような地道な作業も行われている。

三つ目のキイ・ワードは「テーマ」である。女性、都市、村落、事件、監獄、言葉、学校、というようなテーマから「社会主義」にアプローチしようという試みである。既に女性史の視点からは、『堺利彦女性論集』(1983)、『資料平民社の女たち』(1986)をはじめとする鈴木裕子氏の目覚ましい業績があるし、「大逆事件」研究の分野でも「あきらかにする会」が依然として活動を継続し、機関紙を発行し続けている。1996年には被告のひとり高木顕明の復権が東本願寺によってなされ、その事績の解明が進められている。その他のテーマについても、着手はされているので、今後の成果がまたれるところである。

5.

今後の展望について、少しだけ触れておきたい。まずは、研究意識における視野の転換ということである。「社会主義」の思想は、歴史的にみれば「個人」の競争主義に対するアンチ・テーゼとして、つまり「社会」の主義として構想されたものである。「社会主義」は、「個人」の原理や「国家」の原理とも異なる共同性のあり方を摸索してきたのである。あるいは、その共同性をささえる「精神」のあり方を摸索してきた。その原点に立ち返り、「理念の復興」を目指すことが第一の課題である。その点でいえば、歴史的に手垢が付きすぎた「社会主義」ということばを分析用語としては放棄してもよいと思う。第二には、研究方法の転換である。もともと西欧の思想として、アメリカやドイツから「輸入」された日本の「社会主義」の実像をもとめていけば、欧米にいきつく。西川正雄氏が『初期社会主義運動と万国社会党』(1985)で見せた成果は衝撃的でした。また、最近では『初期社会主義研究』(第12号)に掲載されているオーストラリア生まれのアメリカの若い大学院生である、ベン・ミドルトンが書いた「幸徳秋水と帝国主義への根源的批判」は、これまで日本人が何年もかけて出来なかったことを、アッという間にやり遂げてしまった。今後、日本の初期社会主義研究は海外において成果がだされる時代を予感させる。第三には、そのことを踏まえてのリアリティの回復である。もちろん、現実的問題にたいする政策的提言を行うことである。

以上が、字数の許す範囲内での言及、言葉の足りない点をご勘弁願いたい。

韓国学会動向

『政治思想研究』第2集 2000年春号 韓国政治思想学会 目次

韓国政治思想学会は、1995年に発足した若い学会である。たまたま昨年5月の政治思想学会懇親会において、訪日中の李鍾殷氏（現韓国政治思想学会会長・国民大学校教授）にご挨拶いただいた。その際、氏より贈呈された同学会誌『政治思想研究』第2集の目次を以下に翻訳・掲載する。（飯田泰三）

翻訳 李英美

目次

特集：自由主義の誕生と東洋におけるその受容

I 東洋における自由主義の受容

1. 韓国における自由主義の受容

安外順^{アンウエスン}「丁若鏞^{チョンヤクヨン}の思想に見られる西学と儒学の出会いと葛藤—自由主義受容の前史」、梨花女子大学校（BK21事業団）、7頁。

金周晟^{キムジュソン}「金玉均^{キムオクキョン}・朴永孝^{パクヨンヒョ}の自由主義精神」、韓国教員大学^{キョウオン}、37頁。

鄭容和^{チョンヨンファ}「儒教と自由主義」、韓国精神文化研究院、61頁。

2. 日本及び中国における自由主義の受容

金錫根^{キムソクコン}「福沢諭吉の「自由」と「通義」、延世大学校^{ヨンセ}、87頁。

張賢根^{チャンヒョングン}「嚴復（1853～1921）の自由主義理解」、龍仁大学校^{ヨンイン}、119頁。

II 西洋における自由主義の誕生

李鍾殷^{イジョンウン}「英国革命の意義及びクロムウェールの役割」、国民大学校^{クンミン}、145頁。

金秉坤^{キムビョンコン}「英国革命における政治と宗教の問題」、高麗大学校^{コリョ}、175頁。

朴東泉^{パクドンチョン}「オリバー・クロムウェールと自由主義」、国民大学校、195頁。

金飛煥^{キムビファン}「古典的自由主義形成の共同体的土台」、成均館大学校^{ソンギョングン}、221頁。

自由寄稿

金顕哲^{キムヒョンチョル}「朴永孝の保民と民権伸張の構想」、ソウル産業大学校^{サンオプ}、249頁。

金容讚^{キムヨンチャン}「ニーチェのポストモダニズム」、ソウル大学校、273頁。

企画書評

姜正仁^{カンジョンイン}「崔丁云^{チュエチンウン}『5月の社会科学』、ブルビツ社、1999年：絶対共同体の絶対性と非絶対性」、西江大学校^{ソカン}、301頁。

李相翺^{イサンイク}「鄭允在^{チョンユンチェ}『タサリ国家論—民世安在鴻^{ミンセアンチェホン}の思想と行動』、白山書堂、1999年」、成均館大学校、309頁。

附録

1. 韓国政治思想学会彙報、315頁。
2. 定款、324頁。
3. 住所録、328頁。

細目

1. ^{アンウヘスン}安外順「^{キョングクヨン}丁若鏞の思想に見られる西学と儒学の出会いと葛藤－自由主義受容の前史」、^{イフアヨジヤ}梨花女子大学校（BK21事業団）、7頁。
 1. 序論
 2. 西学と朝鮮実学の融合地点：儒学の実用性と西学の補儒論
 3. 丁若鏞の実学思想に見られる西学の受容様相
 4. 丁若鏞の思想に見られる西学と実学の分岐点
 5. 結論
3. ^{キムジュソン}金周晟「^{キムオクキョン}金玉均・^{パクヨンヒョ}朴永孝の自由主義精神」、^{キョウオン}韓国教員大学、37頁。
 1. 知性の系譜
 2. 制限政府の理念
 3. 自由権の理念
 4. 儒教知性の限界
4. ^{チョンヨンフア}鄭容和「儒教と自由主義」、韓国精神文化研究院、61頁。
 1. はじめに
 2. 予備的考察
 3. 「人民の権利」概念の受容と変容
 4. 政治観念の変化
 5. 新しい人間形の模索：市民・君子・士
 6. おわりに
5. ^{キムソクコン}金錫根「福沢諭吉の「自由」と「通義」、^{ヨンギ}延世大学校、87頁。
 1. はじめに：研究対象と研究方法
 2. 「自由」「通義」、そして「共和政治」
 3. 「文明」と「独立」のジレンマ：メビウスの帯
 4. おわりに：「自由民権」と「国権」の間
6. ^{チャンヒョングン}張賢根「^{シクフク}嚴復（1853～1921）の自由主義理解」、^{ヨンニ}龍仁大学校、119頁。
 1. 序論：西体西用
 2. 富強の手段としての自由
 3. 富強国家のための個人自由の制限
 4. おわりに：西化論及び自由からの後退
7. ^{イチョンウン}李鍾殷「英国革命の意義及びクロムウェールの役割」、^{ソクミン}国民大学校、145頁。
 1. 序論
 2. 近代国家の創設
 3. チューダー王朝の近代国家創設
 4. スチュワート王朝の絶対主義への試図
 5. コモンウェールズ（共和国）の保国警政治
 6. 王政復古とゼームスII世

8. 金秉坤^{キムビョンゴン}「英国革命における政治と宗教の問題」、高麗^{コリョ}大学校、175頁。
(詳細目次無し)
9. 朴東泉^{パクドンチオン}「オリバー・クロムウェールと自由主義」、国民大学校、195頁。
1. 序論
2. 自由主義の内容
3. クロムウェールの生涯と英国内戦
4. オリバー・クロムウェールの「均衡」
5. クロムウェールと自由主義
6. 結論
10. 金飛煥^{キムビフアン}「古典的自由主義形成の共同体的土台」、成均館^{ソンギョングン}大学校、221頁。
1. 問題提起
2. 自然状態、社会契約、そして自然人の神話
3. 公益に対する私益の優先性
4. 現代共同体主義に主義に関する脈絡の理解
5. おわりに：自由と共同線の対立的な二分法を超えて
11. 金顥哲^{キムヒョンドン}「朴永孝の保民と民権伸張の構想」、ソウル^{ソウル}産業^{サンノプ}大学校、249頁。
1. はじめに
2. 改革構想の知的背景と「1888年上訴文」の作成
3. 改革の主体としての民の位相と啓蒙
4. 儒教的私有の継承と「保民論」
5. 西欧的私有の受容と「民権伸張論」
6. おわりに
12. 金容讀^{キムヨンヂョク}「ニーチェのポストモダニズム」、ソウル大学校、273頁。
1. ポストモダニズムとは？
2. 歴史的知識に対するニーチェの批判
3. 歴史的濫用に対するニーチェの処方
4. 時間に対するパースペクティブとしての「楽しい科学」
5. ポストモダニストは「楽しい科学」を追及するのか
6. ニーチェの「永遠なる回帰」とポストモダニズム
7. 結論
13. 姜正仁^{カンジョンイン}「崔丁云^{チュエチョングン}『5月の社会科学』、ブルビツ社、1999年：絶対共同体の絶対性と非絶対性」、西江^{ソカン}大学校、301頁。
(詳細目次無し)
14. 李相翊^{イサンイク}「鄭允在^{チョンユンチェ}『タサリ国家論－民世安在^{ミンセアンチェホク}の思想と行動』、白山書堂、1999年」、成均館大学校、309頁。
1. 著者の「朝鮮政治哲学」に対する評価
2. 問題の提起
3. 結論

CSPT2000年度年次大会に参加して

安武 真隆

関西大学の在外研究員として、2000年7月29日から31日にかけて開催されたCSPT (Conference for the Study of Political Thought)の国際学会に参加する機会を得た。通常は春先にアメリカ国内で開催されるのに対し、今回は同学会の設立三十周年を記念する意味もあってか、カナダのケベックにて、また参加者数を確保するために同じ会場で開催予定のIPSAの直前に行われることとなった。学会の統一テーマとしてCitizenship, Conscience and Political Educationが掲げられ、初日の各セッションにはCitizenship、二日目にはConscience、最終日にはPolitical Educationがテーマとして割り振られた。会場となったコンベンションセンターは、城壁に囲まれた旧市街に隣接するUpper Townにあり、ケベック州議事堂にも近いヒルトン・ホテルの地下に広がる本格的な会議場施設で、大中小の会議室を多数備えていた。入場の際して関係者であることを確認するスタッフが常駐していたが、CSPTのことをちゃんと知らされていないようで、共同開催ということになっているカナダ政治学会(CPSA: Canadian Political Science Association/ACSP: Association Canadienne de Science Politique)の名前を出してようやく中に入れてもらうことができた。プレ・セッションが行われているのか、入り口のロビーではIPSAの受付が既に始まっていたが、CSPTの受付が見あたらない。とりあえずカナダ政治学会のスタッフに対応してもらったが、彼らもCSPTのことを余りよく分かっていない様子。すったもんだのあげく、とにもかくにもその場で急ごしらえの名札を作ってもらい、会場に向かうことができた。

今回の国際学会は、CSPT側の説明によれ

ば、カナダ政治学会との共同開催ということになっている(<http://www.tulane.edu/~csptsite/Conference2000.htm>)。しかし、両者はかならずしも対等の関係ではないようで、カナダ政治学会のウェブ・ページ(<http://www.uottawa.ca/associations/cpsa-acsp/>)には、ケベック政治学会(SQSP: Société québécoise de science politique)との共同開催であることは明記されていても、CSPTとの関係には殆ど言及がない。カナダ政治学会のプログラムでは、同学会の政治思想関連の研究者達とCSPTとが共同して一つの分科会を運営することになっているようだ。カナダ政治学会には、政党、ナショナリズム、外交、経済変動と国家、フェミニズムなど現代カナダ政治を中心にAからNまで分科会があり、CSPTは同学会の特別分科会N(b)を構成するというわけである。しかしながら、実態としては、カナダ政治学会が一手に借り切った(その後IPSAが引き続き借り受ける)会場の一つを、CSPTにいわばお目こぼしで提供してもらっているに等しい。他の会議室では、入り口上のスクリーンに、室内で進行中のカナダ政治学会の分科会名が明示されるのに対して、CSPTの会場について何の表示もない。三日目には、カナダ政治学会のゲストという待遇で、CSPTのメンバーも同学会主催のパーティーに招待されたが、政治思想関係者はカナダ政治学会に完全に埋没してしまい、私はどの話の輪に入ることもできず、そそくさと会場を後にすることになった。入り口のスタッフが我々のことをちゃんと認識できないわけである。

さて、学会会場に足を踏み入れてみると、思いの外狭く日本の政治学会の分科会程度の広さであろうか、40~50人も入れれば満杯となってし

まう。休憩時間にコーヒーを飲むコーナーもあるにはあったが、会場からはかなり遠く、何かを飲みながら談笑するという感じではない。日本の政治思想学会の方が、会場の広さも、参加者の数も、お茶やコーヒーのサービスも、こちらを凌駕しているようだ。それでも J. G. A. Pocock, Bernard Crick, Melvin Richter といった著名な研究者を生で拝見でき、他の分科会とは異なり、セッションごとに参加者が入れ替わることもなく、三日間ほぼ同一のメンバー構成で密度の濃い中身が維持されたようにも思う。また、少人数でアットホームな雰囲気のため、休憩時間や初日に行われた懇親会（ワインもおつまみのサンドウィッチも美味だった）では大御所の研究者にも（その勇気さえあれば）声をかけやすいという利点もあった。興味深かったのは、質疑応答の際、司会者が質問者を指名するにあたってファーストネームを呼ぶことの多いこと。お互いに顔見知り同士の濃密な共同体の中にストレンジャーとして紛れ込んだ気分になった。質問する側も、報告者が（そして聴衆も）自分の顔と名前が一致するものとして、自己紹介もそそくさに質問に入ることが多く、その中で何人かのストレンジャーが名前、所属、研究領域など簡単な自己紹介をしてから質問に入ったのが印象に残った。

また、英語圏を中心とした学会であるにもかかわらず、アメリカの現代政治理論家の参加がほとんどなく（開催地がアメリカでないことに

加え、7月末がアメリカ政治学会のペーパーの締め切りにあたっていた、という事情もあったようだ）、The Center for the History of British Political Thoughtなどで活躍している、いわゆるケンブリッジ学派の40～50歳代の研究者がほとんど参加していなかった（プログラムに記載のあった Haakonssen 氏は欠席）ことも残念であった。学会のメンバー構成において世代交代が進んでいないのか、学会の Founding Fathers が依然として質疑をリードしており、司会者としても、そのような大物や知り合いの拳手を無視するわけにはいかないのか、時間切れでストレンジャーにまで質問の順番が回ってこないこともあった。日本国内の研究者が外国語で研究成果を公表するようになったとはいえ、相互交流のさらなる進展のためには、コンスタントに国際学会に顔を出して、こちらの顔を（できればファーストネームも）覚えてもらうという課題が残っているようである。セッションの内容について何らかのことが言えるほど、私に理解できたとも思えない。ここでは、当日配布されたプログラムと報告原稿を手掛かりに、各セッションの概要（CSPT のニュースレター [Volume 29 Number 1, February 2000] や、ウェブ・ページにも事前に発表されたプログラムが掲載されているが、発表者やテーマに変更があった）を示し、次いで幾つか記憶に残った報告について書き連ねることにする。

CITIZENSHIP: Saturday, July 29th

Session I : Montesquieu: Citizenship in Comparative Perspective. Chair: E.J. Hundert [University of British Columbia]. Cecil P. Courtney [Christ's College, Cambridge], "Montesquieu, Bolingbroke, Hume: laws, history and the English constitution". Rebecca Kingston [Saint Francis College], "Education and Citizenship in Eighteenth Century France".

Session II : Rousseau: Citizenship and Foundation Myths. Chair: Pamela Jensen [Kenyon College]. Diane Lamoureux [Université Laval], "La distance entre l'homme et le citoyen chez Rousseau". Bonnie Honig [Northwestern University], "Foundation Myths in Rousseau and Freud".

Session III : De Tocqueville and Democratic Citizenship. Chair: Percy Lehning [Erasmus University, Rotterdam]. James T. Schleifer [College of New Rochelle], "The Art and Habits of Citizenship". Stéphane Dion [Government of Canada], "Tocqueville and the Civic Virtues of

Nationalisme”

CONSCIENCE: Sunday, July 30th

Session IV : Conscience in Early Modern Political Thought. Chair: James Moore [Concordia University]. Edward Andrew [University of Toronto], “Enlightened Consciousness versus Protestant Conscience”.

Session V : The Politics of Conscience, Liberalism and Scepticism. Chair: M.M. Goldsmith [Victoria University, New Zealand]. John Robert [Toronto, Canada], “Thomas Hill Green and the ideal citizen”. Martyn P. Thompson [Tulane University], “Political Education: Michael Oakeshott Revisited”.

Session VI : Conscience in North American Political Thought. Chair: Anthony Parel [University of Calgary]. Douglas Long [University of Western Ontario], “Property and Propriety: the moral context of property theory from Hobbes to C.B. Macpherson”. John Christian Laursen [University of California, Riverside], “George Armstrong Kelly and the Politics of the Scholarly Conscience”.

Session VII : Multiculturalism and the Politics of Inclusion (Joint plenary session with the Canadian Political Science Association). Chair: Guy Laforest [Université Laval]. Charles Taylor McGill University]. Iris Young [University of Chicago]. Bhikhu Parekh [University of Hull]. Benjamin Barber [Rutgers University].

POLITICAL EDUCATION: Monday, July 31st

Session VIII : Political Education I Chair: Lyman Tower Sargent [University of Missouri, Saint Louis]. F.L. van Holthoon [University of Groningen], “Der Begriff des Politischen: Modernization and political education”. Bernard Crick [Edinburgh], “Elements of Citizenship in Schools”.

Session IX : Political Education II Chair: Fred Rosen [University of London]. Geraint Parry [University of Manchester], “Political Education in a Tradition of Civility”. David Kettler [Trent University], “Political Education for a Polity of Dissensus: Karl Mannheim and the Legacy of Max Weber”.

Session X : History, Citizenship and Political Education Chair: Preston King [Lancaster University]. J.G.A. Pocock [Johns Hopkins University], “The Historian and the Political Theorist”. Melvin Richter [City University of New York], “Eclipse of the Political? Changing Conceptualizations of Democracy in Tocqueville and Guizot”.

これらの報告の中でも、ルソーとフロイトのテキストを手掛かりに、民主国家の創設者は外国人であるというテーゼを、マキアヴェッリの『ディスコルシ』やGHQによる日本の民主化、カンボジアにおける明石氏の活躍などを交えて紹介した Bonnie Honig 氏の報告が、多くの聴衆の関心を集めたようである。しかし、なゼルソーとフロイトのテキストがこのテーゼのために選び取られたのか判然とせず、また、それぞ

れのテキストの読みがかなりラフであったことも気になった。モンテスキュー関係の報告でも、北米大陸における問題関心がそうなのか、同時代的コンテキストを踏まえテキストを丁寧に読み込んだ Cecil P. Courtney 氏の解釈よりも、フェミニズムや citizenship など現代的関心に引きつけた（したがってモンテスキューそのものの読みとしてはいささかトリッキーに私には映った） Rebecca Kingston 氏の報告に質問が

集中していた。

もちろん、テキストを歴史的に再構成することだけが重要だと言うつもりはない。James Schleifer 氏のトックヴィルをめぐる報告が、彼の政治思想の要約として手堅く優れてはいても、いささか新鮮味に欠けたものであったのに対して、カナダの Minister of Intergovernmental Affairs で実務に携わる Stéphane Dion 氏が、ケベックとカナダをめぐるナショナリズム問題を念頭におきつつトックヴィルのアルジェリア問題を検討した報告には、トックヴィルの思想と彼の実践とが緊張感を帯びつつ関連していることに感銘を覚えたからである。この他、Bernard Crick 氏の報告は、用意されたペーパーを離れてウィットに富んだ話術で聴衆を湧かせていたが、残念ながらそのようなアドリブを聞き取れる程に良い耳を持ち合わせていない私は、ほとんど話についていくことができなかった。また、Charles Taylor 氏などを交えたマルチカルチュラリズムのセッションは、カナダ政治学会との合同のセッションということでやや広い部屋に会場を移して行われ、当学会の方の参加者が大多数を占める中で (CSPT のメンバーはその中に埋没して) 行われ、盛況であった。

あるテキストを政治思想研究者はどこまで自由に読みうるのか。セッションを通じて私が漫然と抱いたこの疑問に対して、一つの示唆を与えるものが、The Historian and the Political Theorist と題された Pocock 氏の報告であった。ポーコック氏は、この報告の中で、同じ歴史上の人物・テキストを扱いながらも、政治理論・政治哲学と政治思想史とで全く異なる意味を主張しうるし、その意味の妥当性についてそれぞれに異なった評価基準を持ちうることを、架空の「理論家」と「歴史家」とを登場させ、両者の対話を通じて示そうとしたからである。両者の対話の結果、「歴史家」の側からは、理論的・哲学的な活動もある歴史的コンテキストの中で行われていることに「理論家」はもっと関心を払うべきことが主張され、他方で「理論家」側からは、歴史的コンテキストが多様である以

上、その中からあるコンテキストを選択した上で当該テキストを解釈する点で、歴史学と哲学との間に変わりはなく、中には「歴史家」よりも「理論家」の手によって扱われるのがふさわしいコンテキストも存在しうる、という反論がなされる。最終的に、両者が絶えず対話を続けていくことにあくまでも期待するのか、それとも両者の越えようもない溝の深さにそれを断念するのか、聴衆の側もある種の態度選択が求められる報告だったのではなかろうか。これまでポーコック氏は、政治思想の歴史的研究方法を理論化することを通じて、歴史学の側から理論・哲学への架橋を試みてきた。今回の報告のトーンがいささか悲観的だったのは、そのような試みが、理論・哲学の側からのみならず、特にアメリカにおける歴史学の側からも、十分に理解されてこなかったこと (氏は最近、The Machiavellian Moment のアメリカ歴史学における受容が著しく誤解を伴うものであり続けたことを嘆いている。The New York Review, October 19, 2000) に由来するのかもしれない。政治学部と歴史学部とが制度的にそれぞれ自立しているアメリカのコンテキストで、後者において思想史研究に従事するポーコック氏と、法学部・政治経済学部という制度の枠内で政治思想研究を行うことの多い日本の研究者とでは、「歴史家」と「理論家」との対話の可能性について異なった評価の余地があろう。むしろ日本では、そのような制度的枠組みを反映して、より現代的で実証的な政治学と政治哲学や政治思想史との対話の可能性についても真剣に検討されてしかるべきではないか、カナダ政治学会と CSPT との摩訶不思議な関係についてあれこれ詮索しているうちに、そのようなことも考えた次第である。

(やすたけ まさたか、関西大学、現在ケンブリッジ大学にて在外研究中)

理事会記録

1999年度第四回（2000年5月27日、大東文化大学）

1) 新理事の確定

理事および監事に次の諸氏が選任された。

理事

飯島昇蔵（早大）、飯田泰三（法大）、岩岡中正（熊本大）、小野紀明（京大）、加藤節（成蹊大）、菊池理夫（松阪大）、佐々木毅（東大）、佐藤正志（早大）、鷺見誠一（慶大）、関口正司（九大）、添谷育志（東北大）、千葉眞（ICU）、塚田富治（一橋大）、中谷猛（立命館大）、平石直昭（東大）、藤原孝（日大）、松本礼二（早大）、宮村治雄（都立大）、吉岡知哉（立大）、柳父圀近（東北大）、米原謙（阪大）、渡辺浩（東大）、和田守（大東文化大）

監事

亀嶋庸一（成蹊大）、西田毅（同志社大）

2) 大会・懇親会関係

一部報告者の大会報告のテーマ変更が報告され、承認された。また懇親会において、開催校である大東文化大学長、ならびに韓国政治思想学会会長の李鍾殷氏（法政大学客員教授・国民大学校教授）からの挨拶が行われることが了承された。

3) 『政治思想研究』への桜田会からの補助金について

桜田会からの補助金として百万円を受領したことが報告された。その関係で、次の各会員を委員とする刊行委員会の設立が提案され、了承された。

田中治男（委員長）・有賀弘・中谷猛・鷺見誠一

4) 学会誌発行の件

平石担当理事から学会誌の発行について説明があった。なお次期編集委員体制は以下の通りに決定された。

小野紀明（京大、編集委員長）、飯島昇蔵（早大・大会企画）、菊池理夫（松阪大）、吉岡知哉（立大）・渡辺浩（東大）

ただし飯島氏は大会委員として1年後に和田守氏（大東文化大）に交代となる。他の委員の任期は2年となる。また、現在の制作部数は500だが、新委員会で増部を検討していくことになった。

学会誌の販売価格について

3000円で新規入会者に販売する。その他の会員に対して、あるいは一般配布はどうするかは未定のまま次回以降の検討課題となった。図書館で購入希望がある場合、3000円で購入していただく。

5) 99年度決算、2000年度予算

亀嶋監事および鷺見理事から別紙のとおり説明があった。

6) ニュースレター報告

宮村理事から報告があった。次期ニュースレター編集長は飯田理事に決定された。

7) 2000年度5月の学会取り組みと2001年度学会企画について

企画担当の和田・飯島両理事から説明があり了承された。来年度以降の予定と統一テーマは以下の通りである。

2001年度 立大（事務局：法大） 統一テーマ：「政治の臨界」

企画担当：吉岡・西田両理事

2002年度 熊本大（事務局：法大）

企画担当：岩岡・宮村・菊池、各理事

また『政治思想研究』第一号、あるいは第二号で、日本の政治思想に関する座談会を行うべく、渡辺、米原両理事に検討をお願いすることが決定された。

9) 新入会員の承認について

以下の18名の入会が承認された。

石井知章 瓜生洋一 大中一彌 兼田麗子 久保信本 小島秀信 坂本達哉 田中東子
玉城有一朗 永井健晴 中川志保子 布施哲 前田央子 宮澤久美子 村上知章 森達也
安世舟 吉川哲士

2000年度第一回（2000年5月28日、大東文化大学）

1) 代表理事の選出

次期代表理事に佐々木毅氏（東大）が選任された。

2) 理事公選について

事務局提案について、次回理事会までに各自検討していただくことになった。

3) 学会誌の頒布対象、第一号の編集について

小野担当理事より方針の説明があり、また大会報告者に積極的に投稿をお願いすることとなった。

4) ニュースレターについて

学会誌との関係が難しいが、書評論文等を中心に今後検討していくこと、また春号に関してはできるだけ連休前に送付することとした。

5) 2002年度熊本大研究大会について

岩岡、宮村、菊池の三理事に企画を依頼することとなった。

6) 新入会員の承認

以下の9名の入会が承認された。

相原征代 海老沢智士 大木康充 鎌田厚志 塩見佳也 田村哲樹 西谷紀子 萩原稔
山口晃

7) その他

事務処理上の問題から事務局担当の杉田氏の理事会出席が承認された。将来的には開催校、事務局担当者は自動的に理事となることが議論された。また韓国政治思想学会と今後積極的に交流していくことが提案され承認された。

2000年度第二回（2000年10月7日、名古屋大学）

1) 今後の運営について

学会議に加盟申請すべきかの問題につき、佐々木代表理事から、学会議の現状等を含め、報告があった。種々議論の結果、継続して審議することとした。これとの関連で、前年度事務局から提案があった理事公選についても、次回に議論することとした。

2) 学会誌について

小野担当理事より、応募論文の審査状況等について報告があり、審査結果の通知方法などについて議論があった。

3) ニュースレターについて

飯田担当理事より、書評企画などの進行状況について報告があった。

4) 2001年度研究大会について

吉岡担当理事より、企画がほぼ固まった旨報告があった。自由論題セッションの運用などをめぐって、議論があった。

5) 新入会員の承認

以下の6名の入会が承認された。

川合清隆 Joly, Jacques 関口すみ子 高橋愛子 竹島博之 本間信長

6) その他

本年度中をめぐりに新たな会員名簿を作成することが確認された。

政治思想学会1999年度会計報告書*

収入	金額 (円)	支出	金額 (円)
前年度繰越金	1,655,369	研究会開催費	128,837
会費**	1,098,800	会報費	172,409
研究会参加費	20,000	事務局費	12,760
利子	880	通信費	147,850
		座談会費	136,610
		繰越金	2,176,583
	2,775,049		2,775,049

* この報告書は1999年4月1日から2000年3月31日までの収支に関するものである。

** 会費とは、1999年度期間中に納入された会費の合計金額である。

*** 繰越金の内訳は以下の通り。但し、繰越金には名簿作成積立金200,000円を含む。

	現金	940
	郵貯	500,743
	振込口座	1,674,900
		2,176,583

政治思想学会2000年度予算

収入	金額 (円)	支出	金額 (円)
前年度繰越金	2,176,583	研究会開催費	170,000
会費	1,700,000	会報費	170,000
研究会参加費	20,000	事務局費	13,000
補助金	1,000,000	通信費	250,000
利子	414	座談会費	130,000
		学会誌費	1,050,000
		名簿作成積立金	300,000
		繰越予想金	2,813,997
	4,896,997		4,896,997

第8回政治思想学会研究会 企画案

期日：2001年 5月26日(土)・5月27日(日)

会場：立教大学(池袋)

統一テーマ：政治の臨界

プログラム

5月26日(土)

- 9：30～12：30 研究会1 自由論題
12：30～17：00 研究会2 近世・近代における「政治」をとりまく空間
17：00～17：30 総会
17：30～19：30 懇親会

5月27日(日)

- 9：30～12：30 研究会3 19世紀思想における「政治」と社会
12：30～13：30 理事会
13：30～14：00 総会
14：00～17：00 研究会4 現代政治理論における「政治の臨界」

第1日 5月26日(土)

研究会1 自由論題 (9：30～12：30)

司会 松本礼二 (早稲田大学)

報告者 久保信本 (成蹊大学)

17世紀後期ヨーロッパにおける宗教的寛容の問題

中野剛充 (東京大学)

リベララーコミュニタリアン論争の「政治」的転回とその諸問題

——ロールズとサンデルの議論の展開を中心に——

藤本眞悟 (尼崎東高等学校)

北一輝の政治思想

李 秀烈 (九州大学)

「民本主義」における国家と民衆

討論者 押村 高 (青山学院大学)

荻部 直 (東京大学)

研究会2 近世・近代における「政治」をとりまく空間 (13：30～17：00)

司会 飯島昇藏 (早稲田大学)

報告者 川出良枝 (都立大学)

政治における道徳性——名誉と尊厳

山岡龍一 (放送大学)

政教・一致／分離／共存——Civil Society'再考

東島 誠 (東京外語大学)
「江湖」という名の言説空間

第2日 5月27日(日)

研究会3 19世紀思想における「政治」と社会 (9:30~12:30)

司会 関口正司 (九州大学)

報告者 北川忠明 (山形大学)

社会学的思考と政治的なもの——19世紀フランスにおける

鏑木政彦 (九州大学)

生活と歴史の間——ディルタイ精神科学における政治の地位

大久保健晴 (都立大学)

明治初期知識人と統計学——『文明論之概略』と『表紀提綱』との間

研究会4 現代政治理論における「政治の臨界」 (14:00~17:00)

司会 萩原能久 (慶応大学)

報告者 有賀 誠 (防衛大学校)

法の支配をめぐる——批判的法学研究の問題提起を中心に

藤田潤一郎 (関東学院大学)

倫理と政治——ウォルツァーの場合

三宅 芳夫 (東京大学大学院)

「アナーキズム」と「実存主義」——ジャン・ポール・サルトルの政治思想

会員名簿情報の更新について

事務局

近日中に新しい会員名簿を発行する予定ですが、それをより正確なものとするため、名簿情報の更新について、会員の皆様にご協力いただくことにしました。

同封した葉書に、必要事項をご記入の上、事務局までご返送くださるようお願いいたします。特に、今回初めて、Eメール・アドレスの欄を設けることにしましたので、ご注意ください。

なお、名簿にどこまで個人情報に記載するかについても、基本的にご本人のご意向を尊重することといたしますので、その点につきましても、ご指示くださるようお願いいたします。

2001年1月20日 発行人 佐々木 毅 編集人 飯田 泰三

政治思想学会事務局 郵便振替番号 001907571218

102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1 法政大学法学部

杉田研究室内

電話：03-3264-9448 fax：03-3262-7822 E-mail: sugita@i.hosei.ac.jp